

## 第8回ワークショップ記録

びわ湖大津歴史百科 第8回ワークショップ

「源氏物語の挿絵 ～源氏絵から読み解く雅の世界～」

講師：狩野 博幸（日本近世美術史家）

内容：講演／体験（源氏小鏡の塗り絵）

日時：2017年12月10日（日） 13:00～16:00

場所：石山寺塔頭 明王院（〒520-0861 大津市石山寺1-1-1）

参加者：22名



### 【講演概要】

石山寺は紫式部が『源氏物語』の着想を得た地といわれています。『源氏物語』は、桐壺から始まる五十四帖で構成され、紫式部の時代から多くの人に愛されました。『源氏物語』は文学作品としてだけでなく、後に主要な場面が「源氏絵」として絵画化され、絵巻や冊子絵として鑑賞されるなど、日本の美術にも大きな影響を与えました。

石山寺にも、数々の『源氏物語』に関連する宝物が所蔵されています。その中でも『源氏小鏡』は、物語の五十四帖各巻について、あらすじ、登場人物、和歌などをわかりやすく解説し、その間の重要な場面の挿絵を一枚添えた「五十四帖で読む源氏物語」として十四世紀ごろ作られたものです。石山寺本『源氏小鏡』は、端麗な筆致の古写本であると同時に、挿絵は美しく精細な彩色画です。このような彩色画の挿絵を持つ『源氏小鏡』は、わが国では石山寺本だけです。今回は『源氏小鏡』をはじめとする源氏絵の深い魅力に迫っていきます。

またセミナー後には、この石山寺本『源氏小鏡』の塗り絵体験の時間も用意しています。ぜひお楽しみください。

## 【講師プロフィール】

狩野博幸（かの ひろゆき）

日本近世美術史家。

九州大学大学院博士課程中退。京都国立博物館研究員、同志社大学文学情報学部教授を歴任。

---

## 【講演内容】

### 『源氏小鏡』とは

今回の話の契機となるのは『源氏小鏡』ですね。云わば、『源氏物語』のそれぞれの巻のダイジェスト版といった本でございます。

そもそも『源氏物語』というのは皆さんご承知のように大部のものになりまして、それで言うと登場人物の人間関係もまた複雑で、なかなか専門的にそこをきちとやらないと解らないということもでございますね。それは、『源氏物語』が書かれて、広まっていく間にもやっぱり同じような問題が起こったみたいです。フランスの近代小説で、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』という大部の小説がありますが、ああいうものでもやっぱり、一片に話をするとするのはなかなか難しい。そういう意味で、「ダイジェスト版が作られると良いなあ」と世間の人々は思う訳でございます。

『無名草子』という鎌倉時代に出た文芸評論書がございますが、これが、『源氏物語』の梗概を示した一番古いものです。鎌倉時代にすでにこういうものが出ており、当然、これは写本で様々に広がっていく訳でございます——。

さて、今回の『源氏小鏡』というものはですね、『源氏物語』の内容を巻ごとに説明している訳でございますが、この『源氏小鏡』自体はどうも南北朝時代から成立したみたいで、それが後世にもずっと続いていく訳ですね。それぞれの場所や時代で、そして現代でも、先ほど座主からお話がありましたように、様々な形で同じ『源氏小鏡』というものが書かれて、広まっていった。それは江戸時代に入ると、木版印刷にされて更に広まるということにもなった訳です。

その中でも、石山寺の『源氏小鏡』が非常に稀有な例であるというのは、他の『源氏小鏡』が文字だけで書かれているのに対し、この石山本には挿絵が付いています。『源氏物語』を読まれた方はご存知だと思いますが、『源氏物語』はその話の中にも「これはまるで絵のようだ」とか、「これは絵にしたら良い」とかいうふうなことが出てきます。やはり何処かで、紫式部という人が「絵」というものに対して関心を持っていたことが窺えます。この石山本の『源氏小鏡』では、文章と同時に絵もついている、まさにこれは、紫式部が本当はやりたかったことかも知れませんね。

### 地方にも伝わる絵画としての『源氏物語』

ということで、今日は『源氏小鏡』に導かれるようにして、特に私は近世絵画の専門でございますので、関連のある近世絵画作品を見て頂きたいと思います。

『源氏物語』を（絵画として）描いた、例えば、様々な扇絵であるとか、それから屏風、襖などがございますけれども、なかでも室町時代の終りぐらいから江戸時代にかけて描かれた『源氏物語』の屏風というものが、いまま日本中に沢山残っております。私も博物館勤務の時代を通じて、沢山の『源氏物語』を見て参りました。しかし何故、都だけではなく、田舎や地方にも『源氏物語』の屏風があるのか、ということが不思議に思われる方も多いかと思います。

これは、例えば、国宝になりました上杉家本版の『洛中洛外図屏風』というのがございますね。あれは、狩野永徳の作品で、信長が佐々成政に持たせて越後の上杉謙信のもとへ届けさせたもので、その屏風がいまでも残っている訳でございますが。何故こういう話をするのかというと、実は、そのときに『洛中洛外図屏風』と一緒に『源氏物語図屏風』も持って行っているんです。要するに、一緒に京都から運ばせている訳なんですね。『洛中洛外図』という京都の街を描いた、云わば現代風俗ですね、それと京都の歴史・文化が生んだ一大文学『源氏物語』を描いた屏風を、「対」として送っている訳なんです。

実はこれは、例えば井原西鶴の小説なんかを読みますと、町人の婚姻なれば、京都から地方へ輿入れをするというときには、この『洛中洛外図』と『源氏物語』の屏風を娘さんに持たせて嫁入りをさせる、ということがそれとなく書かれておりますね。それは、江戸時代になりまして、そういう上層の町衆の間で同じようなことが行われていた訳です。現代の京都の街というのを「私はここから来たんだ、ここから貴方の元へ行くんだ」と言うのと同時に、都が持っている文化的な優位性ですね、それを源氏物語の屏風として一緒に持たせている訳ですね。そういうふうなことで、いまでも日本中の至る所に、沢山の『源氏物語』の屏風が残っているのです。

### 『源氏物語図扇面帖交屏風』

例えば、これは 15 世紀の終りから 16 世紀の始めぐらいに描かれたものです。「扇面」というのは、扇に描かれたもの、だからこれは元々屏風として描かれたものではなくて、扇絵として描かれたものを後の時代になって屏風に仕立てたものです。後の時代と言っても、この背景（屏風部分）に描かれた蔦、そして薄い金泥、——金を叩いて潰してニカワにつけて絵の具にしている訳でございますが、薄く金が撒かれておまして——これなんかを見てみると、大体桃山時代よりも少し古いぐらい、という感覚ですね。ですから、屏風になっていること自体も古いということになるんですけども、絵からいうともう少し古い訳でございます。ちなみに、これは大和絵の絵でございます。

また、これらの扇面は、いわゆる「扇面画帖」として纏められていたものだと思いますが、それがこのように、六曲一双の屏風の全面に貼り付けたものとなりました。こういう形でも、『源氏物語』の絵画化されたものが日本中に広まっていったということですね。

ちなみにこの屏風では、『源氏物語』の一番最初の「桐壺」から、扇面がずっと順番に並んでいますね。それから、『源氏物語』の簡単な文章が、文字が書かれているのが見えますね——。

### 『伝永徳筆 源氏物語図屏風』

#### 右隻 全体

この屏風、これも六曲一双の屏風でございます。これは宮内庁三の丸尚蔵館にございます。

「伝永徳」と言われていますが、時代的に言っても、また非常に大胆な画風から言っても、——特に右側の柳のところなんかは他の絵描きでは出来ない描写ですね——私は永徳筆と言い切っても良いんじゃないかと思います。

#### 左隻 部分<若紫>

部分を見ていきますと、例えば、絵の奥に屏風がございますね。屏風が屏風の中に描かれている訳ですね。これは巻物なんかでも同じなんです、こういうものを我々美術史の研究者は、「画中画」として非常に大事にします。研究の対象とする訳です。

そこで、この屏風の中の屏風の絵は、本来ならばこれは平安時代の話（『源氏物語』）なので、平安時代風の屏風でな

ければならなかった。けれども、この屏風はそのように描かれていない。「画中画」というのは、どうしても、それが描かれた時代の癖が出てしまうものなんです。このような、画面が六面にわたって続いているような屏風は、平安時代には無い訳ですね。平安時代のものは大体、一枚ずつが独立しているような形式です——まれに画面が続くようになっているとしても、それぞれの間には空間があります——。だけどこれはもう明らかに、近世の屏風が描かれている。そして、その屏風の中に描かれている屏風絵の画風が、特に桃山時代の盛期、天正年間の画風を示している。じゃあそうなるとこれは、やはり永徳が関わったという可能性が、非常に大きくなる訳なんです。

### 「御物（＝天皇の持物）」の話

それで、先ほど、宮内庁三の丸尚蔵館という名前が出ましたが、これはつまり「御物」を飾る美術館として建てられたものなんです。

では何故、宮内庁三の丸尚蔵館が建ったのかというと——。昭和天皇がお亡くなりになったときに、これは私もよく分からないんですが、我々にとっての相続税のようなものが発生するらしいです。それがあって、天皇家は「物納」で、持物を税金の代わりに国に納められた。それが昔は天皇御物と言っていたのですが、今は国有財産になっている訳です。この天皇御物というのは沢山ありますよ、色んなものがあります。それが、国のものになり、つまり国民の財産になった訳ですから、公開をしなければいけない、ということでこの三の丸尚蔵館が建てられた訳です。

本来ならば、『伝永徳筆 源氏物語図屏風』も、国有財産になりましたから、これは国宝であるとか重要文化財であるとか、そういうふうにしても良いのでありますが、実際にはなっていません——。私はいま、10年目ぐらいになりますけれども、指定文化財を選定する委員を務めております。絵画の部門だけで十人ぐらいですかね、「これは重要文化財にしましょう」とか「国宝にしましょう」とか、あるいは「重要文化財から国宝へ格上げしましょう」とか、そういうことを決める委員会があるんですね。それで、先程出てきました『上杉家本 洛中洛外図屏風』なんかは、長い間重要文化財でありましたが、1990年ぐらいですかね、国宝になった、そういう経緯がございます——。

### 『源氏物語画帖』

#### 京博本『源氏物語画帖』概要

扇面というのがありましたよね、扇絵として『源氏物語』が描かれる。それから屏風絵、あるいは襖絵などでも『源氏物語』が描かれる。そしてここでもう一つは、「画帖形式」と呼ばれるものです、云わば「色紙型」といってもいいですね。ですからそんなに大きなものではありません。この画帖にも『源氏物語』は描かれます。

その中で、今日皆さん方にお見せしたいのは、この、京博本『源氏物語画帖』土佐光吉画です。先にお配りした資料には、「土佐光吉、長次郎筆」というふうに私は書いていますが——。このことについては後でお話します。

この『源氏物語画帖』、これも石山本『源氏小鏡』と同様に、絵と、右側に書があります。『源氏物語』の中の一部分を取り上げたような文章が書いてあって、それと対になるように、「桐壺」からずっと絵がある訳ですけども。それは、後陽成天皇以下、当時の貴族たちの書いた書、それが対になっている。それも非常に若い、幼い子供の字なんかもあったりして、中々面白いんですけども——。

それで、この、京都国立博物館（京博）の所蔵している『源氏物語画帖』は、今は四冊のものになっていますが、本来、これは二冊（二帖）のものだったんです。

#### 京都国立博物館の変遷

このことについて、——京博の歴史というのは本当にややこしいので、端折って言いますと——元々京都の博物館と

いうのは、東京、奈良と同様に、「帝室博物館」ということでしたね。「帝室」というのは、これは「天皇の」という意味なんです。だから、今は文化庁からの予算でやっていますが、その時期は天皇のお金で、つまりは宮内省のお金で建てられ、運営されていたものでございます。それがですね、例えば、日清戦争であるとか日露戦争などで国費がどんどん使われたということもありまして、天皇の云わば私物である博物館とか、土地とか、そういうものが「下賜」されることになったんですね。京都なら京都、東京なら東京に譲り渡して、後の運営はそちらで・・・、ということになる訳です。上野の動物園もそうですよ、あれは恩賜動物園ですよ。つまり天皇家から東京都（府）へ下賜されたものです。

それと同様に、京博も、「恩賜京都博物館」というものになります。これが確か昭和4年です。ですからこれは京都市が運営をする、ということになった訳です。それから昭和28年になって、また、この「恩賜京都博物館」から、今度は国の博物館「京都国立博物館」というものになりました。本当にややこしい流れがあって、これは東京・奈良の博物館ではそういうことはありませんでしたので、要するに京博に限っては、天皇家・宮内省が運営するというものから、京都市へ移って、そしてまた国の運営へと変わったということなんです。

それで私は、この京博本『源氏物語画帖』の物品台帳をかつて調べたことがあります。そしたらこれは、「昭和4年4月19日に宮内省から京都市へ下賜された」とありました。つまりそれはどういうことかと言うと、「元は帝室博物館のものであった」ということです。ただしこれが、帝室博物館の時代に（何処からか）入ってきたものなのか、あるいは元々天皇家が持っていたものなのか、そこまでは解りません。恐らく天皇家が持っていたのではないかと、私は思いますけれど、それ以上は調べることが出来ない訳ですね。

#### 『源氏物語画帖』の修理

こうして、この『源氏物語画帖』が京都国立博物館の所蔵となり、昭和40年代ぐらいには修理が行われました。修理されて、様々なことが解った訳ですね。全部剥がしていきますから。まず解ったことというのは、これが全くうぶの状態であったと、つまり全然修理もされていなかったということです。

この画帖というのは、折れ本になっておりますから、どうしても下になっているもの（裏面にくるもの）は傷つきやすい訳ですね。ですから裏面になるものがないようにして、貼り付けてあるのを全部剥がして保存する為に修理がされた訳です。こうして表と裏を分けてやったので、元々二冊本であったのが四冊本になった訳なんです。

#### 修理から明らかになった二人の絵描き

剥がされた色紙、絵の色紙ですね、当然その裏側が出てきたわけです。

実はこの『源氏物語画帖』の絵は、全54図ありますが、一人がすべてを描いた訳ではない、ということが解る。それは、「なんか画風が違うなあ」と外からでも解っていたんだけど——。大体35枚ぐらいと、あと10枚、10枚とありまして、その一番元になっている（35枚の）「桐壺」から「早蕨」あたりまでですかね、それには判子が押してあった。裏側に。これは外からでは解りませんでした、修理しなかったら解らなかったことです。円い判子が押してありました。それも赤ではなくて、墨印です。35枚にわたって「久翌」という判子がずっと押してあった。だからこれが、絵描きであろうということが予想できる訳ですね。そして「久翌」というのは、「土佐光吉という人である」ということが以前から解っておりましたから、ここで私たちは、こんな嬉しいことはないですね。「絵描きが誰か、はっきり解る」ということは。

そしてこれは54枚の絵になっておりますけれども、実は、『源氏物語』54巻全てのお話が描かれているわけではありません。光吉の判子「久翌」印の押してある35枚の後、これは実は、「繰り返し」というのが出て参ります。つまり、同じ画題のものが出て参ります。例えばこれからお見せする「末摘花」の絵も、同じように、繰り返し出て参ります。

その繰り返しの内、「久翌」印の後につづく10枚くらいは、(判子もサインも)何もない。そして最後の10枚には、「長次郎」という、これは判子ではなくて、墨で書いたものが出てきたんです。ですから、この『源氏物語画帖』は土佐光吉と、長次郎と——あともう一人は誰なのか解りませんが——の手によるものと考えられる訳です。また、何故光吉画が35枚程で終わっていたかと言うと、光吉は慶長18年頃に亡くなるんですね。だからそれ以後作られていったものが、後半の20枚ぐらいに、ということだと思います。

#### 『源氏物語画帖のうち末摘花 土佐光吉画』

これは「久翌」印の押してある方の「末摘花」でございます。

「末摘花」のお話は、僕でも知っているぐらいなんで、皆さん方のほうがお詳しいと思いますが——。この絵は、源氏が、常陸宮の娘(末摘花)に会いたいと思い、それでこの透垣のところから覗き見するというような場面ですね。ところがそこに頭中将が先回りして来ていたんで、云々、という話になるわけでしょ。この、右側の男性が源氏でしょうね。で、左側が頭中将。この場面、向こうには簾が掛かっていて、琴を弾いている女性がいる。ただそれだけの、この有名な「末摘花」のシーンを描いた絵なんですけれど。

#### 『源氏物語画帖のうち末摘花 長次郎画』

一方、こちらは長次郎のもの。同じ「末摘花」が、このように画帖の最後のほうでもう一回繰り返されているんです。これは不思議ですよ。何故なのか、この辺りは推理していくとなかなか大変なことになるので、今日はそこまで立ち入りませんが。

同じ画帖にある、同じ巻「末摘花」の絵であるのに、微妙に、顔とかが違うんですね。そしてこれ、長次郎画のほうには「簾が上がって」いる。こういうことが一体どうして起こるのか。これは、絵描きが描くときにですね、やっぱり何かを参考にするわけです。それはここでは『源氏物語』であると。しかしその『源氏物語』の梗概書というのはいくつもあって、例えば石山寺の『源氏小鏡』系列のものもあれば、当然また違うものもある訳です。だから本来ならば物語を全部読めば分かることだけでも、ダイジェスト版を読むと、その辺りが分からなくなる。ここの透垣だって、こんなに破れていますよ(光吉画のものは破れていない)。

私は、この長次郎という人は光吉の子供であり、後に光則と名乗る人であろうと考えています。もしそれが正しいとすれば、同じ工房にいる親子がですね、描いているのに、透垣(の表現)を見ただけでも全然違う。見てください、長次郎画では破れています。これは、破れていて良いんですか。「常陸宮という高位の人の娘が、何でこんな風(透垣の破れたところで暮らしている)になってるの？」ということにもなりかねない。

#### 破れた透垣と、上げられた簾

(本来この場面では)源氏は、透垣から覗くだけけれども、末摘花の顔は見えない訳ですよ。そして何ヶ月か後で会ったときに、「ことのほかうたて(不細工)な顔だったということを知る。しかしそれでも愛情を注いだ、という話でしたよね。ですから、光吉画の方はきちんと、この簾が下がっているということで、これは「源氏は顔を見ていない」ということを示している。一方長次郎画では、これは簾が上がっていて、見えている。透垣も破れているから、すぐ見える。もしこれが初めて末摘花に会う場面だとすると、少なくとも源氏の見からは、顔が見えないようにしておかなきゃいけないはずですよ。ではどうして、こういうことが起こってくるのか、何で破れているのか。

この源氏と末摘花の話は、後に、源氏が明石から京都へ戻って来たとき、また末摘花に会いに行きますね。しかしそのときの末摘花は、零落して、——「蓬生」の巻ですね——「庭の中は荒れ果てていて・・・」ということになる訳で

す。しかしそれでも源氏は末摘花に愛情を注いだ、という話になるんですが、つまり、長次郎画の「末摘花」には、「蓬生」も混じっているんです。だから破れているんです。

こうなりますと、長次郎は『源氏物語』のどういう風な梗概書を読んだのか、ということが気になりますね。あとで石山本『源氏小鏡』の挿絵も出てきますので、これについてはまたそのときにお話を——。

### 『源氏物語画帖のうち若菜上』土佐光吉画

これはまた、光吉のほうですね。「若菜上」の場面を描いたものです。

柏木たちが、庭で蹴鞠をしていて、女三宮（絵の左下）が簾のこちら側からそれを見ていたんだけど、この猫——これは中国辺りの猫でしつたっけ、変わった猫でしたよね——が、簾の横から走り出た。猫の紐を、女官（絵の右下）が持っていたんですが、猫が走り出たために簾が捲り上げられてしまって、女三宮の顔が見えてしまったと。それで、彼女のあまりの美しさに、柏木は惹かれていって、ややこしい問題が起きていくという話ですよ。ね。「美しいにも程がある」女三宮の顔を、見てしまった、そういう物語ですよ。

#### 若菜下

これは「若菜上」の次の「若菜下」。柏木が、あのと時の猫を手元に置いている、そういう姿が描かれていますね。

### 石山本『源氏小鏡』

#### 末摘花

ここからは、石山本『源氏小鏡』の挿絵を見ていこうと思います。

まず、「末摘花」はこうなっています。これは、光吉画と同じような綺麗な（破れていない）透垣です。だけれども、光吉画のものでは下ろされていた簾、これはここでは上がっている。この『源氏小鏡』の挿絵は、当然この『源氏小鏡』の文章に応じるようにして描かれているはずなので——。そうすると、先程見た土佐光吉のものとは違うのは、一体何なのか。むしろ、長次郎のものとは簾は一緒なんだけれど、しかし透垣は、光吉のものと同じ。

ですからこういう同じ一つの場面でも、描く画家、あるいは時代によって、その元となるものがこういう風に、絵に影響を与えていく訳なんですね。

#### 若菜上

こちらは、庭の方から見た姿として描かれていますね。

この簾が、微妙ですね、顔が見えているのか見えていないのか。一応、簾の後ろになっている感じではあるんですけどね。だからこの女性も驚いたような顔をしている。しかし、これが女三宮だとすると、こっち（絵の右奥）にいなきやいけないですね、こっち（絵の左手前）は女官の方ですからね。

（光吉画『源氏物語画帖』に戻って。）これは、女三宮のほう、屋敷の中から見た姿になっている。勿論これは吹抜け屋台といって、天井が抜けていますから、向こうの庭の景色もこのように見えて、描かれている訳ですけども。

#### 若菜下

これも、家の中の柏木のほうからではなくて、違う角度で描かれています。

庭に咲く木々なども、ひとつひとつ比べて検証していくと、解ってることがかなり多いと思います。この先、この石山本の『源氏小鏡』というのは、更に細かい研究が必要になってくる、そういった「内容」を持ったものだと思います。ここに描かれている画中画も、比較検討する必要が出てくるでしょう。

## 河鍋暁斎記念館蔵『横たわる美人と猫』 河鍋暁斎筆 明治四年以降

河鍋暁斎（かわなべきょうさい）というのは江戸の人です。江戸の終わりから明治にかけて生きた、本来狩野派の絵描きです。色々変わった絵も描いているので、ご承知の方もいらっしゃるかも知れません。

### 河鍋「狂」斎

この絵について、「明治四年以降」とありますが、何故これが解るかという、落款の「河鍋暁斎」という字が「暁」の斎と書いてあるわけで——。これは、ですね、美術辞典なんかを見ても、読みが「ぎょうさい」と書いていることがあります。しかし、暁斎は明らかに「きょうさい」なんですね。それは何故かという、明治三年の暮れにかけて、彼は牢屋に入るわけです。少なくとも、彼は無実だと思っているんですけど、とにかくそれがあって、名前を変える訳です。それまではどう書いていたかという、実は、「狂斎」という字です。この「狂う」というのは本来、現代のいわゆる精神的な病の意味ではありません。「狂」という文字は、「芸術にとっては重要である」という考え方があります。曾我蕭白であるとか、あの人たちは自分が狂人であると呼ばれることを欲したぐらいですからね。「狂なる精神」、つまり一般的な、我々みたいな平凡な精神ではなくて、その一段階、あるいは別次元の精神を持っている、それを「狂」という。「狂なる魂」ですね。だから河鍋は「狂斎」としていたんですけども、牢屋に入って、出てきてから「暁斎」という字に変えた訳です。つまり、いつから「暁」になったかが解っていますから、この絵がそれ以降の作品であるということが解る訳ですね。ただ、未だに「ぎょうさい」と言う人も多くて困るのですが——。

### 猫と美人と簾

この絵を見ていただきますと、これは一般的にはですね、遊女です。遊女が、あられもない格好で横たわって、太腿が出たりしている。そこに猫がいる。じゃあ季節はいつか。簾がついている、夏だ。だから夕涼みでもして、遊女が涼んでいるという姿なんです。

これは、このまま鑑賞しても当然良いわけですけども、しかしこれは、ここで、『源氏物語』の「若菜上」というものを知っている人には、この簾と猫で「はは一ん」と解る訳であります。でも、解らなくても良いですよ、別に構わないんです。平安時代の格好をしているわけでもありませんから。だから「遊女がひとり、ちょっと休みをとっている。夏の日の午後」とかいうことで理解しておけばそれで済むんですけども、ここに簾があって猫がある、そして綺麗な女性がいて、というところから『源氏物語』の「若菜上」を想起する人もいて、ということを暁斎は予想して描いているんです。

### 江戸人の教養『源氏物語』

ですから、『源氏物語』というものが、平安・鎌倉・室町という頃はですね、ある程度の上層階級、そしてその子弟であるとか、そういう人々に読まれたと思いますけれども、江戸の始めぐらいには、木版印刷になって流布しますから、文字が読めるほどの人は読む、ということが出来るようになった訳です。しかもこの梗概書というものが出来る訳ですからね（梗概書は室町から始まり、江戸時代に版本になった）。そういった、江戸人の教養ですね、そういうものが暁斎のこの絵からも窺い知ることが出来ます。彼は、京都の絵描きではありませんからね、これを頼んだり、鑑賞したりするのは江戸の人、あるいは明治の最初期の人たちであった、ということになります。

それから、お渡しした資料の一番下に、「柳亭種彦作『儂紫田舎源氏』」と書いてありますが、これは勿論「田舎源氏」となっていますから、『源氏物語』を念頭に置いて書かれた小説本です。合巻本という、小説本で、挿絵がついたりもしますけれど——。これで彼は筆禍事件を起こしているのですが、これの物語は、応仁の乱の辺りの時代に置き換えられ



ていて、作中に出てくる人物が、徳川家斉を茶化するようなものだとして取締りの対象になった訳ですね。しかしこれは、『源氏物語』が元になっている」というところが重要なんです。この本は勿論、木版印刷で出ましたし、そういう江戸の町民たちが読む小説本として出されていたものですから、そういう中で醸成されている、町人もですね、この絵（暁斎画『横たわる美人と猫』）を見たときに、「若菜上」を想起する、そういう絵であったということでございます。

### **新出『源氏物語図屏風』**

今日は折角の機会ですし、どうせ私は源氏物語の権威でも何でもないので、大した話も出来ないだろうと思ったので、ひとつづらいは皆さん方に、「お土産」を見せないといけないだろうと思って——。この屏風はですね、つい二週間ほど前に見た屏風です。それはある道具屋さんなんですけど、そこで「ちょっと面白いものが入ったんですけど」と言われて、見たものがこの屏風。これはまだ誰も見ていません。僕以外にはその業者の人と、このデータを撮ってくれた写真家、それ以外は誰も見ていません。だから皆さん方は、そういう意味ではこの屏風の発見に立ち会った、ということになります。

#### **屏風一双目 全体**

一番右上に描かれているのが、「霽標」ですかね。それからその下が「絵合」かな、一番左下が「少女」です。それから「霽標」の横、真ん中の上のほうですね、これは多分「花宴」だと思います。

#### **屏風二双目 全体**

これも、右上が「梅枝」ですか。それからその下が「胡蝶」、「胡蝶」はすごく解りやすいんですけども。真ん中上が「空蟬」ですかね、それから左上、これは雪だるまがありますから「朝顔」ですね。左下がちょっと解りにくいんですけど「関屋」でしょうかね。ともかく、こういう屏風が新しく出て参りました。私の推定ではですね、桃山時代の終りから江戸最初期にかけてだと思います。そのことは、今からお話しますが。

#### **部分 <岩>**

この岩の辺りを見ておいてください。

#### **部分 <道具類>**

例えば、こういう道具類なんかに時代が出てくる訳です、画中画と同じように。少なくともこれが描かれた頃より以後のモノというのは出て来ない訳ですから（つまり、その絵が描かれたとき、すでに存在していたモノだけが描かれる）。少なくとも上限（時代の、古いほうの限界）が解る訳です。例えばこの蒔絵、金蒔絵が施された道具。つまりこの絵は、必ずこの道具が出てきて以降のものである。ということは一番、上限ですね、それがはっきり解るということです。

#### **部分 <滝>**

この滝の描き方も、癖があるんだな。狩野派の描き方ですねこれは。

### **狩野長信筆『国宝 花下遊楽図屏風』**

#### **左隻**

ではここで、こちらの屏風をご覧ください。これは、国宝の『花下遊楽図屏風』というものです。こういう風に、（絵の左に）八角堂がありまして、（手前で）料理の準備をしたりして、（右で）歌舞伎踊りをやっている。歌舞伎踊りをやっているということは、——これ全部実は、男の姿をしています、全員女性が演じています——慶長八年 1603 年に、歌

舞伎踊りというのが始まる訳ですから、それ以後のものであるということを、この絵は示していますね。

(右下に) 特徴的な岩が描かれています。これを覚えておいてください。

それから、ちょっと分かりにくいかも知れませんが、お堂のところに貴公子がいるんですが、これが誰か、ということとで――。

#### 右隻

この屏風は六曲一双のものですけども、本に載ったり、それから展覧会に出てくる場合、左隻だけが載っていると思えます。これは何故かと言うと、(右隻の中央二曲は) ポロボロになっていますね、これは、関東大震災のときにちょうど修理に出ていて、火事に遭うわけなんです。それで、この部分が焼けてしまう。だから今は、ここの二枚、絵はありません。(今お見せしている) これは、それ以前に撮っていた写真を上からはめ込んでいる訳です。

そして焼けてしまったここに、人物が、中心になる女性がいる。実はこの人物とよく似ている人物がいます。淀君です。或いは、淀君図なんていう絵がありますけど、それと非常によく似ている。

#### 左隻

そうすると、このお堂のところにいる貴公子というのは、秀頼だということが解る。淀君と、秀頼が描かれていると。(歌舞伎踊りが始まった) 慶長八年 1603 年というのは、秀吉はすでに死んでいます。秀吉が亡くなったのは慶長三年 1598 年ですから。で、慶長三年以降のものであるということがこれで解る。しかもこれはですね、屏風両隻に判子が押してあります。この判子は、長信筆ということが判明しているものです。(左隻左下と右隻右下に) 判子が、赤く見えるでしょ。これが判子。これに「長信」と書いてある。

長信という人は、1577 年から 1654 年、かなり長生きしている人なんです。

それから、(左隻右下と右隻左下の) こういう岩。こういう岩の表現というのは、狩野派の中にほとんどありません。唯一あるのが、この屏風の中に出てきて、しかもそれが長信筆ということが明らかになっているんです。

#### 狩野派系図

では、長信とは誰なのか。

狩野家。元信から始まり、「松栄」とあるのは、これは三男なんですね。宗信(長男)、乗真(次男)、そして三男の松栄なんですけれども、元信お爺さんは、この松栄の長男である「永徳」に家督を継がせたかった。永徳の才能がすごいということを見抜いていますから。「狩野家を背負っていくのは、この子(永徳)しかいないぞ」ということで、永徳を宗家にする為に、わざわざ三男である松栄にまずは家督を継がせる訳です。その永徳には、宗秀、言信という弟がいて、そして末の「長信(松栄の四男)」という弟がいる。つまり、永徳と長信は兄弟なんです。

永徳は 1590 年に死にます。それ以後、狩野家は大混乱に陥るわけですね、カリスマ経営者が亡くなっちゃったので。しかしそれを、江戸まで続けさせて、狩野家(派)というあの大派閥を作った張本人がこの長信なんです。このことについて、私は長い論文を書いています。この人がいなかったら狩野家は危なかった、そういう人です。永徳が 1590 年に亡くなり、宗秀は 1601 年には亡くなっている、ところが長信は 1654 年まで生きる。要するに、永徳の弟ではありますが、年齢が離れていて、小さかった訳ですよ。それが長生きしてくれたお陰で、狩野家がようやく安泰を得ることが出来た。けれども、それが狩野家にとって本当に良かったかどうかは分かりませんよ、何故かと言うと、狩野家の絵というのが(永徳の死後、)発展性を見なくなった。大名格になって、権威は最高になるんだけど、それから狩野家の絵に、若干の例外を除くと、本当の力はなくなった。だから、良いのか悪いのかは分かりませんが、とにかく長信という

人が、永徳無きあとの狩野家を守り繋いだということです。

### **岩皴の描写**

それで、何故私が長信の話をしているかと言うと、見てください、新出『源氏物語図屏風』のここ（岩皴）と、『花下遊楽図屏風』のここ（岩皴）。岩のこのくるっくるっくるという描写。本当は、岩はこういう風にして（カクツカクツカク）描くわけでしょ、狩野家の岩としては。「岩皴」と書いてありますけれどもね、岩の皴（皴）の描き方です。つまりこの新出『源氏物語図屏風』は、この長信の可能性がある。いやむしろ、僕は長信の作品が出てきたと思っています。

『花下遊楽図屏風』に「長信」という判子をわざわざ押しているというのは、これを注文した人が、例えば天皇家であるとか、或いは名代の大名であるとか、そういう人じゃない人だから「長信」の判子を押すことが出来たわけ。これはずっと江戸時代も続きますよ。例えば天皇家からの注文があって、応挙が絵を描くとする。しかしそこに「円山応挙」って書けませんよ。非常に高い位の人からの注文があった場合は。

しかし、この、今日皆さん方にお見せした新出『源氏物語図屏風』については、（判子はありませんが）私は長信でいいと思います——勿論、もっと細かい調査が必要になると思いますが——。しかも時期というのが、江戸時代に入ってからじゃなくて、慶長年間だろうというふうに思っているんです。そうなるんですね、長信の『源氏物語』っていうのがここで出てきたとなると、我々にとってははすけれども、非常に面白い。「ようやく出てきたな」と。つまり、我々は長信の風俗画しか知らなかったわけだから。それがこういう『源氏物語』という雅な世界のものを描いた、しかもここには判子がない、だからその注文主っていうのも一体どういう人か、ということが様々に想像出来る。

だから、この一雙の新出『源氏物語図屏風』というのは、非常に画期的な、我々の研究にとっては本当に吃驚したものですから、それで今日は皆さん方にもこの屏風を見て頂きました。これが私は、なろうことならですね、日本に留めておきたい。でも分からないですね、いつの間にか海外に出ることがありますので。もしかすると、皆さん方が本物をご覧になるときは、外国から借りてきた屏風になる可能性もありますね。「出来れば日本人に売ってね」と頼んではいるんですけど——。重要文化財とか指定品であれば、海外に出すことは出来ないんですけどね。とにかく、この桃山時代の終わりの、しかも永徳亡き後の狩野家の水準というものを、末の弟である長信という人が、こういう風に維持し続けたんだ、ということを示す作品でもある訳ですね。

『源氏小鏡』に誘われて、色んな話をしてしまいました。ちょっと取り留めのない話になったので、皆さん方も戸惑われたかも知れません。以上、今日はこれで終わらせて頂きます、ご清聴ありがとうございました。